令和６年度　東京都立足立新田高等学校　全日制課程　学校経営報告

東京都立足立新田高等学校長
小髙　潤子

１　学校運営の評価

今年度は、昨年度からの教育活動をさらに充実させ、学校行事を学校全体で実施することに重点を置き学校経営を推進させることができた。併せて、社会情勢や教職員の業務遂行力は、常に先を見据えた学校の現状の正確な把握へと導き、校長方針の大きな原動力となった。

学校生活満足度　８３．３％

（１）成果となった実績

ア　統合型支援システムやＣ４th 導入に伴う事故ゼロ
イ　適切な組織連携による情報共有化を実現
ウ　若手及び中堅教員専門性向上研修を活用した研究授業　計１０回以上実施
エ　学校見学・説明会　全２６回実施　参加者　延べ１６５６名
　〇推薦に基づく選抜　倍率　　一般２．８倍
　〇学力に基づく選抜　前期入試　倍率０．９２倍
　　後期入試　倍率０．９７倍
オ　ペーパーレスの取組での職員会議の実施
カ　校長からのホームページを使用した情報発信の実施

（２）課題となった問題点

ア　統合型支援システムやＣ４th 導入に伴う教務部内業務の負担増
イ　１～３年次及び中堅教員の各研修制度を活用した研究協議会の形骸化
ウ　受検生のニーズに応える授業や部活動の体験型説明会の検討
エ　生産性向上と業務軽減を目的とした校内ネットワーク環境の強化

２　学習指導の評価

観点別評価についても、学期ごとの評価についても、定期的に教科会を実施し検討するとともに、成績会議等においても、各教科の疑問点や課題を共有し、共有理解を図った。

授業満足度　７３．６％

（１）成果となった実績

ア　各定期考査や小テストの結果から生徒の習熟度を適切に把握し、学習グループを適宜再編成することで基礎学力と学習意欲を効果的に高めた。
イ　観点別評価の導入に伴い、全教科・授業での生徒の主体性を引き出すアクティビティな授業を定着させることで生徒の日々の学びを評価できる体制づくりに努力した。
ウ　各教科（公民、家庭、総合的な探究の時間、人間と社会）及び各学年団（特別活動等）と連携し、主権者及び消費者教育の研修会を実施し、意識の醸成を図った。

（２）課題となった問題点

ア　全ての教科において、購入パソコンを有効活用させる授業力の獲得
イ　教科「公共」の円滑導入に向けた他教科との連携方法

３　生活指導の評価

コロナ禍による生徒の心的不安定への支援を管理職と生徒指導部主任、及び学年主任、養護教諭とが困難さを共有し、一貫した対応で安心・安全な学校生活を維持した。生徒間同士の大きなトラブルもなく、学ぶ者と教える者との信頼を基盤にした良好な人間関係を構築した。

しかし、複雑な家庭環境が要因となり、保護者との確執からネグレクトへと発展する現状

があるため、継続的な寄り添いが必要と判断する。　　生活指導満足度　７６．８％

（１）成果となった実績

ア　各行事における全校実施、生徒会が主体的に取り組み、実施した。

イ　養護教諭のリーダーシップによる教育相談体制は、親子関係等の悪化から生じる生徒の生活課題解決に向けて大きな原動力となった。

ウ　社会情勢を鑑みての校内規則改定は、教職員及び生徒との共通理解を図ることで、大きなトラブル等もなく、安心・安全な学校生活を維持できた。

エ　体育祭、文化祭、ロードレース大会等の３大行事における全校実施では、全職員連携して実現させた。

（２）課題となった問題点

ア　ブラック校則や人権侵害といったマスコミからの情報が氾濫する中、これまで学校が努力してきた生活指導上の課題解決の経緯についての理解啓発

イ　保護者からの過剰な苦情や不当な要求と併せて、ネグレクト、無関心、過干渉などの保護者養育力への教員対応力の向上

ウ　入学後も生活指導について理解不足でいる保護者の現状を踏まえ、指導方針を本校の特色として価値付けられるように入学前の説明内容の充実を図る。

４　進路指導の評価

進学・就職問わず、進路実現に向けての計画的な支援を基盤に、生徒の可能性を引き出す対応を継続させた。多様な進路実現に向けて、大学進学・専門学校・就職等を目指す生徒へは、進路指導部のきめ細やかな指導等により進路実現を図った。　　進路決定率　９３％

（１）成果となった実績

ア　生徒が自己の弱みに向き合う貴重な資料とするため、学年との連携を図り、進路指導を行った。

イ　ニトリホールディング株式会社とのインターシップ連携事業を３年間進めてきた結果、参加した生徒達からは自己肯定感が高まったという結果が得られた。

（２）課題となった問題点

ア　「子どもの権利条約」等の観点から、進路規定についての継続的な見直しや検討

イ　特進クラス経営について、生徒育成像の明確化

ウ　一人一台端末導入伴う、進路の行事や学習における活用機会の更なる確保

エ　C4th 導入による調査書作成について学年との連携強化

５　特別活動の評価

新しい日常生活が定着する中、生徒指導部と学年団が連携して学校生活における生徒のモチベーション維持に努めた。特に、部活動や委員会活動、学校行事に向けての準備等、仲間との協同で充実させる推進は、学校全体の帰属意識の醸成に大きく寄与した。また、修学旅行や校外学習、地域ボランティア活動等も、実施に向けての努力が実り、無事に実現できたことは大きな成果である。

（１）成果となった実績

ア　感染症対策の徹底により部活動等の集団感染がなかった。

イ　一人一役の役割で臨ませた学校行事への取組は、クラスの団結心を強めた。

ウ　教科での地域保育園との連携による取り組みでは、各生徒は幼児を保護・見守り等の役割を任せることで高校生の貢献についての意識を効果的に高めた。

オ　練習時間の確保、校外での練習や演奏を積極的に勧めるなど最大限の支援を保証したことで各部活動が輝かしい功績を残した。

部活動加入率　６５％

（２）課題となった問題点

ア　これまで以上の最大限の部活動支援方法の検討

イ　宿泊を伴う部活動（合宿）の実現に向けた準備体制の確保

ウ　行事を精選することを踏まえ、慣例や前例からの脱却を図る新しい取組とその方向性

エ　オンライン学習デーの円滑実施に向けた各教科、各学年、各分掌との連携強化

６　その他の評価

前例や慣例に左右されない教職員の力強い実践的責任感に支えられ、校長としての経営責任を果たすことができた。特に、学校の現状を正確に把握しての取組は、生徒、教職員、管理職が三位一体となってこの一年間を乗り越えることができたと確信する。

（１）成果となった実績

ア　生徒及び教職員の健康管理体制、各行事における全校実施など、円滑な学校運営を進め、安心・安全の教育活動を確保した。

イ　外部指導員１３名を確保し、運動系、文化系を問わず挑戦することの大切さを啓蒙した。

ウ　育児、介護、健康を最優先とするための制度活用、及び計画的年休の取得など働き方を具体的に変えていくことで新たな時代に相応しい労働意識の醸成を図った。

エ　猛暑対策とする冷風機のレンタル、ＩＣＴ機器等の適切な購入、学校施設老朽化に伴う修繕や１０年先を見据えたデジタル機器の増設を優先させるため、経営企画室との連携を適切に図った。

（２）課題となった問題点

ア　特別な支援を必要とする生徒やその家庭への対応についての共通理解

イ　閉塞感の打破を目的としたスマイルプロジェクト等の都教委施策の円滑実施

ウ　育児や介護等の制度活用後の講師を含めた後任補充者不足への対応